

## 東京大学教育学部附属中等教育学校 こころの相談室「ほっと・ルーム」

2002年4月～2003年1月 活動報告

長谷川 恵美子・久保嶋 大 介・高 橋 均・亀 口 憲 治

### 1. はじめに

1998年に分室として附属学校内に設置された「ほっと・ルーム」も、今年で5周年を迎えた。5周年を迎えるにあたって、昨年度末、この部屋の新たな発展のために、「ほっと・ルーム」開設時の目的と、これまでの活動を見直す検討会が行われ、そこで、この「ほっと・ルーム」が附属学校側の長年の要望に応えるものとして、また「学校支援方略の開発」を目的として設けられたものであることが確認された(近藤 2001)。そこで本年度は、「学校支援」の中でも特に、この部屋の設立を求めている附属の教員への援助を目的として活動し、その中で、学校という1つの組織のルールを乱すことなく、「様々な人が、いろいろな角度から、いろいろな手助けをして、1人の成長を支えている」という学校臨床の特色を最大限に活かすことを目指した。

「ほっと・ルーム」の開設者である近藤が指摘した、学校内に設立されたカウンセリングルームにおいて最も発生しやすい問題は、①カウンセリングルームにおける、特別のルールの有無と、②カウンセラーが面接で得た情報の学校への開示と守秘義務の2点である。

この部屋にあるルールは、ただ1つ、「ほかの人の、こころもからだも絶対に傷つけないこと」というルールだけである。また「ほっと・ルーム」ではすべての学校規則が適応されてきたために問題点①は発生していなかった。逆に、「部屋に上がる時は靴を脱ぐこと」、「出したもの、使用したものは自分で必ず片付けること」という学校の他の場面ではあまり求められないものの、常識的な行動を促す指示は時折行っていた。

問題点②については、カウンセラーが非常勤であるという条件を考慮し、生徒と、「どのように本人のことを担任に伝えるのか」などを話し合う作業を重視するよう心がけてきた。このような作業を生徒が拒むことはなく、逆に「ぜひ教員に伝えてほしい」と頼む生徒も見られた。また昨年度末に数回行われた、「生徒のこころのケア」に関する講習会、合同事例検討会などによって、学校スタッフ全体の中に、「生徒のこころのケア」に関する共通認識が深まったことも、この種の問題の発生を予防し

ていた。本年度は、「ほっと・ルーム」のみならず、学内の様々な場所で、短時間ではあるが頻繁に、それぞれの担当者との情報交換や相談を行うことが可能となった。この結果、教員、ほっと・ルームのスタッフが、日々、場面によって変化する生徒の姿を、「学校生活全体」の中で捉えることができるようになり、自然と互いに積極的に協力を要請する姿勢が生み出された。そして学内のみならず、医療機関・地域の相談機関など外部との連携体制づくりもスムーズとなった。

このように本年度の「ほっと・ルーム」は、昨年度までの「生徒に提供する『居場所』としての部屋から、「生徒が気楽に出入りでき総合的な『生徒支援』を行う学内の窓口」としての役割を担いつつあるように感じられた。これは「ほっと・ルーム」そのものが学校の雰囲気になじんだものになり、また学校で生活する様々な人のこころの中で、「学校の一部」として位置づけられたためではないかと思われる。

### 2. 本年度の「ほっと・ルーム」の様子

開設当初より、生徒達が気楽に相談できる「居場所」としての部屋作りを目指し、機能を拡張し続けてきた「ほっと・ルーム」であったが、今年度はその体制を保てなかった。昨年度は、こころのケアグループの積極的な援助を受け、開放型カウンセリングルーム(以後、「オープンルーム」と表現する)を週に5日間開室することが可能であったが、お昼休み・放課後の時間帯を生徒のために割くということは、授業、生徒指導など多様な仕事を任されている教員にとって決して負担の少ないものではなかった。そのため本年度は学校の方針変更により、昨年度同様、カウンセラーが来校する2日間のみ開室となったためである。この人手の減少を補うため、昨年までほっとルームの事務補助として採用していた非常勤枠で、本年度はカウンセラーを雇用することとなった。つまりもともとカウンセラーが勤務していた2日間に2名のカウンセラーが勤務するという、「カウンセラー2名体制」ととった。この体制を検討する際、「その2名を1名ずつ異なる曜日に置き換え、カウンセラーが在室する日数を増やす方がよいのではないか。」とも考えられた

が、昨年度の「オープンルーム」の利用状況を考えると、面接件数が増加し、カウンセラー業務が多様化すると、せっかく生徒が利用し始めた「オープンルーム」の時間確保が難しくなってしまうことが懸念され、この体制が決定された。実際に、この2名体制をとってみると、「オープンルーム」活動中に生徒の面接予約が入った場合でも、生徒が急に追い出されてしまうことが減り、来室を期待した生徒が入室できない状況が少なくなった。なお生徒が来室しやすい時間帯が重なりやすいため、2名のカウンセラーが時折、同時に面接することになった場合は、学校側の協力をえて、空き教室を利用して対応することができた。

しかしひとたび週に5日の開室になれてしまった生徒たちにとって、週に3日間の閉室は予想以上に負担となったようである。残りの2日間に部屋の利用が集中するために、生徒達が昨年度に比べ、互いに譲り合うことができにくい状態となった。オープンルームで自由に相談できる機会を失ったために、相談件数が急増し、結果的に「オープンルーム」として開放する時間がほとんどなくなってしまった。「なぜ『オープンルーム』が減らされてしまったのか。」「自分達が『オープンルーム』を閉鎖させるような悪事を働いたことがあったのだろうか。」と閉室への不満を訴える生徒も少なくなく、入り口に自分たちの切実な思いを「らくがき」していく生徒や、足の踏み場もないほど込み合っている入室してくる生徒達への対応にスタッフが苦慮することとなった。このため昨年度同様、週5日開室することが再度検討されている。

### 3. オープンルーム

昨年度の「オープンルーム」(誰でも、自由に出入りできる時間)の成果から、本年度も、「生徒が利用しやすい空間作り」をめざし、できる限り、生徒のあき時間に、部屋を開放するよう心がけた。オープンルームに訪れた生徒数は、表1のようである。本年度は多い日には、35人が同じ部屋に入ることになるなど、昨年度よりもはる

かに多くの生徒が利用していた。利用者のピークは、これまでと同様、5月に見られたが、昨年度はすぐにおちついたピークが本年度では夏休み寸前まで続き、またさらに12月から1月にかけて2番目のピークがみられた。利用者の男女比は、およそ5対4であり、利用者の男女差はあまり見られなかった。利用者の学年を調べたところ、例年通り1～3年生までの利用者が多く、特に、1、2年生の利用率が高かった(図1参照)。

このように低学年の利用者が多かったため、高学年が圧倒され、入室を躊躇する様子も見られたが、もともと常連であった生徒が先輩となり部屋に現れると、自然と上級生が下級生に対して、「そういうこというと退場だぞ!」「そろそろ授業に戻る時間だぞ!」とルールを教え、また「出したものは片付けていけ!」と道具の片付けなどを手伝いながら指導しているほほえましい姿も見られた。このように、常連であった上級生が時折、顔を出すことで、オープンルーム活動がよりスムーズになり、他学年との交流が進んでいた。

昨年度に比べ、「オープンルーム」の開室曜日が半分以下となったため、一度に多くの生徒が殺到し、一度入室したら、混雑しても退室しないなど、昨年度のように譲りあうことが少ないように見受けられた。このように生徒たちのストレスが高まる状況では、カウンセラー2名体制は非常に有効であった。

オープンルームの玩具の中で最も人気があったのは、昨年度同様「大きなクマのぬいぐるみ」と、そのクマの負担が大きくなってきたために、本年度購入した大きな「大トトロ」のぬいぐるみである。同じようなぬいぐるみではあるものの、「年季の入ったクマ」の方は、男女を問わず、赤ちゃんのように生徒たちに抱かれて癒されることが多く、「大トトロ」の方は、格好のじゃれる相手と役割が分担されていた。このため生徒達の体当たりであった「大トトロ」の方は、何度か縫い合わされることとなったため、保健室で不要となった包帯を縫合後のトトロのおなかに巻くことにした。この包帯は生徒達の手加減を促すだけでなく、腹部の補強効果もあり、その後

表1 2002～2003年 ほっと・ルーム オープンルーム (男女別) 利用者数 注:週に2日のみ開室

	4月	5月	6月	7月	夏休み5 日間のみ	9月 (秋休)	10月	11月	12月	1月	1月まで の合計
1～3年生 男子	8	72	106	89	29	48	47	31	49	112	591
1～3年生 女子	55	129	72	44	3	23	35	48	36	73	518
4～6年生 男子	5	4	17	3	0	15	17	7	3	2	73
4～6年生 女子	1	5	2	4	0	3	5	3	0	7	30
来室総数	69	210	197	140	32	89	104	89	88	194	1212

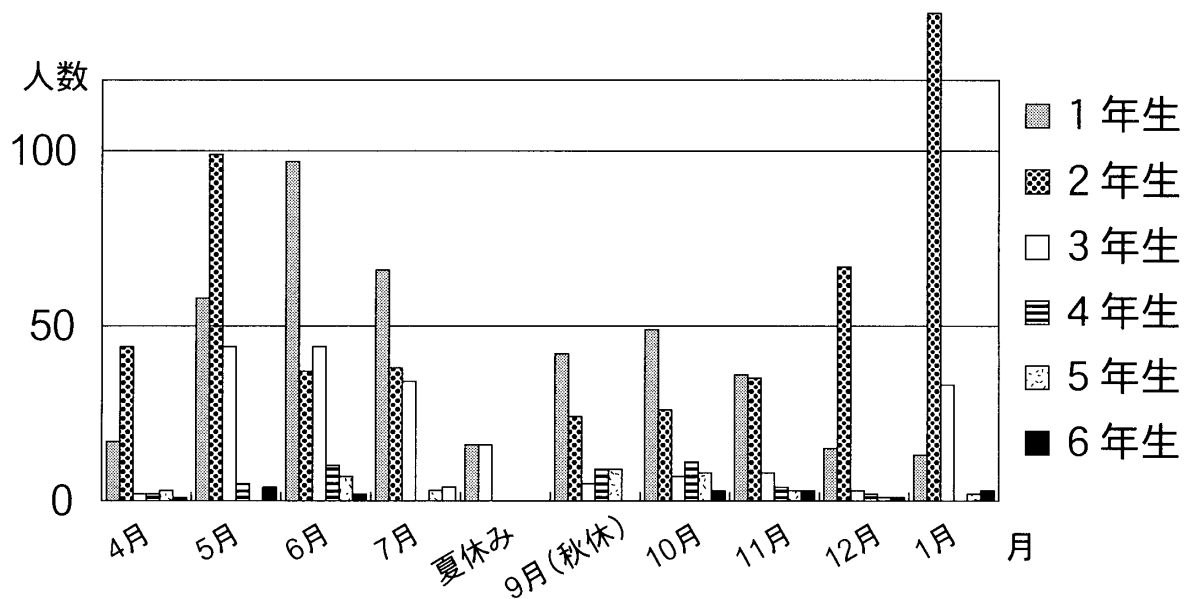


図1 学年別オープンルーム利用者数

は縫合されることはなくなった。

次に人気が高かったのは、マグネットでできたおもちゃのダーツと、おもちゃのコマである。これらは、昨年度の卒業生の寄贈であった。先輩の寄贈であることは、生徒達のニーズに似合ったものであるというだけでなく、親しみやすさも与えていたようである。またギターは、昨年度同様に人気が高く、多くの生徒がそれぞれ演奏したり、楽器の取り扱い方など教えあっていた。さらに本年度は絵を描く生徒が多く、ほっと・ルームの壁にその1枚を貼ってみたところ、それに触発されて多くの生徒が貼りだしを希望して、壁が生徒の作品でいっぱいになった。多くの生徒が匿名でペンネームだけで張り出しているため、「誰の絵なのか」を推測することは、訪れた生徒の話題ともなっていた。

#### 4. 個別相談

本年度1月までの生徒の相談件数は136件である(表2参照)。これは昨年度の6倍以上である。このように相談件数が増加した理由としては、①中心となるカウンセラーが2年目に入り、生徒や学校スタッフとカウンセ

ラーとの関係が落ち着いたこと、②オープンルームの開室日数が減ったため、オープンルームでの相談では間に合わなくなったこと、③開室日の減少によって、開室日に部屋に大勢の生徒が殺到し、相談できる場所の確保が難しくなったこと、の3点が考えられる。この面接件数の急増に伴い、カウンセラー2人体制であっても追いつかず、やむをえずオープンルーム時間を削り、面接を重視することになった。この影響で、生徒が戸口に悩みを落書きするなど、昨年にはみられない生徒の行動が見られたため、学校側と話し合い、教員の協力を求め、来年度よりほかの曜日の「オープンルーム」の再開が前向きに検討されている。

個別相談の申し込み方法は前年度同様、①電話による申し込み相談、②直接来室、③申し込み用紙をポストに入れて予約するという3通りの方法であったが、例年通りほとんどの生徒が、②「直接来室」による申し込みを利用しており、相談申し込みの専用ポストが利用されたのは、1年間に2件であった。相談件数が増加し混みあったことで、生徒の中で相談することが特別のことではなくなり、かえって相談しやすい環境が作られたとも考え

表2 2002～2003年 ほっと・ルーム 面接件数

	4月	5月	6月	7月	夏休み5 日間のみ	9月 (秋休)	10月	11月	12月	1月	1月まで の合計
生徒相談	4	18	9	28	0	16	17	20	10	14	136
保護者相談	0	1	3	7	0	4	5	4	4	5	33
先生との相談協議	0	5	2	3	0	2	2	6	5	6	31

られる。なおポストを利用した2件については、2人とも、オープンルームの常連者であり、「日頃カウンセラーとは話しているものの、改めて真剣に話しを聞いてほしいので時間をとって欲しい」という気持ちで申し込み用紙に記入したと語っていた。このことから、この申し込み用紙による相談申し込みは、「人目に触れずに」、あるいは「はずかしいから」という理由だけではなく、生徒の相談への決意を表現する1つの重要な選択肢であるように思われた。

相談内容としては、生徒の相談では、教師や友人との対人関係、家族の中での葛藤、進路への不安などが多く、保護者の相談では、子どもへの対応についての戸惑いや、学校とのコミュニケーションに関する相談が多かった。保護者の相談では、家族全体が参加する家族療法も取り入れられた。また今年度は、生徒の様子や生徒への対応に関する教員からの情報提供や相談が例年になく多くみられた。このため、教員から紹介されるケースも少なくなく、保護者からの相談件数も40件（2月末まで）を越えた。これは昨年度の8倍（昨年度5件）である。本年度は、短期の相談よりもむしろ、ある程度の期間、保護者と学校で連携しながら生徒を支えるようなスタイルがとられることが多く、担任、学年あるいは管理職との連携も進み、学内での役割分担が明確になりつつある。

## 5. 研修会・勉強会

生徒たちの問題行動に対し、学校のスタッフが共通理解を深めることは、対応を早め、相互の連携を促進するものである。昨年度に引き続き、こころのケアグループが中心となり、現代の生徒が抱える心身の症状の理解を深めるための講習（研修）会が開催された。講習（研修）会では、本大学教育学部教育心理学コースの田中千穂子助教授を招き、「問題行動を起こす子供たちのこころ」についてご講演いただき、その後、生徒への対応について活発な議論がなされた。個別の事例検討会は、一見ストレートな教員援助と思われるが、大人数で行うものとしては、担当する教員の精神的負担となりやすいことが指摘されたため、本年度はあえて、研修会というスタイルをとることとした。なお個別の事例検討に関しては、少人数で行うこととし、かかわりのある教員とカウンセラー、養護教諭で検討した。

また、昨年度の「虐待」についての講習会に引き続き、ほっと・ルームと保健室とで「虐待」に関する勉強会を開催した。この勉強会は、昨年度の講師であった、田中島晃子講師の御協力を得て、実際に本学において発生した際に、どのような対応をとることができるのかのシス

テム作りを目指したものである。このことにより、外的機関とほっと・ルームおよび保健室の役割分担が明確になり、連携システムの基盤が完成し、機能しはじめた。

## 6. 教師へのメンタルヘルス講習会

その他、本年度は教員へのケアとして、ほっと・ルームが主催した、「教師へのメンタルヘルス講習会」が開催された。このような教員自身のための講習会が開催されたのは初めてである。この講習会は、講習会そのものが教員の負担とならないよう、平日のお昼休みの30分間に限定し、さらに昼食を食べながらの参加も認められる形で行われた。第1回の「ストレスとストレス対策」では、教員が感じやすいストレス、また陥りやすい心身の状態とその対策についての講習会が行われた。第2回はより実践的なものとして、GHQ12（一般健康調査12項目）を用いた実際のストレスチェックと、自律訓練法を主とした、ストレス解消法の実習が行われた。なおこの講習会は、①実際にほっと・ルームが「生徒に対してどのような考え方で、どのように対応しているのか」を教員に知ってもらうこと、②教員のストレスを軽減することで、生徒のストレスを軽減できる可能性があること、③教員が行う「生徒へのストレス対策」へのきっかけともなりうることを、の3点が期待されて行われたものである。これらの講習会には全教員の1/3～1/2が出席したが、お昼休みの時間を割くことができにくいという意見も聞かれた。まだまだ新しい試みであり、改善点はあるものの、この試みは、今後グループワークを含めた実践的な講習会として、教員のストレス軽減につながるよう継続されることとなった。

## 7. 3年目を迎えた臨床心理入門

2000年より、学校臨床センターと附属中等教育学校の共同開発授業として、高校3年生の選択の授業を利用した「臨床心理入門」を開講している。3年目を迎えたこの授業は、生徒が自分を知り、将来を考え、現在の社会の中で生きてゆく力を養うことを目的に、グループワークを活用した体験型授業形式をとり、さらにその力の定着を目指すために、積み重ね型のカリキュラムを取り入れた新しい形の授業である。

本年度は特に、①コミュニケーションの力、②自分の将来を考え決定する力、③自己認識を深めること、④自分の考えを発表する力、⑤他者に共感でき他者と共生できる力、⑥協働作業を通して他者に共感し、ともに問題解決してゆく力、の6領域の力の向上を目指した。また日本の生徒にとってはなじみにくいグループ作業を円滑

に進めるため、グループ作業を、①グループに分かれ個人作業をする段階、②グループで正解・不正解のない課題について意見を発表する段階、③グループメンバーの意見をもとに自分の意見をまとめる段階、④グループ同士で話あう段階、⑤グループで同じ目的に向かい作業を進める段階、⑥クラス全体で話し合う段階、という6段階にわけ、回を重ねるごとに、次第により高度な段階のものを導入するように配慮した。さらに、昨年度の受講者からの要望もあり、授業の最後の5～10分の時間を利用し、その日の授業内容に即した初歩的な生理学、心理学、社会学などの専門知識を紹介する、「まめ知識」の時間を組み入れた。

この授業の試みを検討するため、生徒による授業評価、受講者と、非受講者の主観的ライフスキル（授業で取り扱ったもののみ）の習得状況と精神的健康度に関する質問紙調査（GHQ12）調査を行ったが、授業前に行ったGHQの調査では、全体の50%以上の生徒がなんらかの精神症状を感じている可能性が示唆された。なおその平均値に、受講者、非受講者の差、性差はみられなかった。またアンケート調査から、「友人とのコミュニケーション」、「家族とのコミュニケーション」に、主観的にスキルのなさを感じていた生徒が受講している可能性が高かったため（ $p < 0.05$ ）、本年度は授業の中でコミュニケーションのテーマに重点を置いた。

2002年度の授業で生徒の評価が高かったのは、昨年度同様、「傾聴」「自己理解」「キャリア」「ストレス」であり、受講者の、受講後のコミュニケーションスキルの向上が主観的な評価ではあるが確認された。この授業については2003年度も引き続き、同様の授業を試み、生徒にとってより親しみやすい、より有意義なものを現場の教員とともに、また生徒達とともに築いていく予定である。

## 8. 連携の様子

当初、週2日の限られた時間の中で、本年度のオープンルーム活動を昨年度レベルで機能させることは難しいように思われた。しかし教員、ほっとルームを卒業していった生徒達、あるいは現在利用している生徒達の積極的な協力があって、「オープンルーム」が昨年度よりも生徒を支える連携の場としての働きを果たすようになったように思われた。そこでそれがどのような形で行われていたのかを数例をあげて紹介したい。

### a. 無言の協力

受験を控えた6年生のAは、空き時間などを利用して、ほっと・ルームにちょくちょく顔をだしていた。ある日、Aとカウンセラーが、とりとめもなく話しているところに、泣きながら2年生のBが駆け込んできた。カウンセラーが、「クラスでいじめにあい、部活にも行く元気がない」と泣きながら話すBをなだめながら話を聞いていたのだが、Bは、部活は好きなものの、なかなか動けないらしい。そんな時に、これまでほっと・ルームに来たことがない5年生がひょっこり顔を出した。彼女はBが慕っている部活の先輩だった。その先輩が、「行こうよ！ 迎えに来たよ！」と笑顔で声をかけると、Bは、「行ってくる！」と笑顔で先輩について行った。Bにとって、それがその時に何よりも嬉しいものだったに違いない。それにしても偶然にしてはできすぎているな…と思って、ふとAをみると、Aがポケットに手を入れごそごそと何かをいじっていた。なるほど、Aが、その先輩にメールをいれて呼んでくれたのだった。お互いに顔を見合わせるとAは微笑んだ。学校で禁止されている携帯電話を私に見えない形でこんなにさりげなく使ってくれる彼女のやさしさに、こころが温まる思いだった。そして立派なアシスタントがこの部屋にいることを心強く思った。

### b. カウンセラーにはできない関わり

Cは、まだまだ新しい環境になれることができない1年生。悪気はないものの、つつい他の生徒と行動が異なり、クラスの中で浮いてしまった。彼の友人も、彼の良さを十分知り、彼らなりにフォローするものの、なかなか上手く彼をサポートできない様子だった。Cは、友人作りは上手ではないものの、みんなと一緒に過ごすことが好きで、「オープンルーム」という時間を楽しみにいつもやってきていた。愛嬌があり元気なCではあったが、時にはしゃぎすぎて、羽目をはずすこともあり、休憩時間後もなかなかクラスに戻ろうとしないため、カウンセラー泣かせの存在だった。そんなある日、数年前までほっと・ルームの常連だった5年生のDがふらっと顔をだした。Dは、同じ部活に所属するCが気になって様子を見に来たのである。Dはどうも落ち着かないCの様子をみて、「おい、弁当いいのか？ 食っちゃうぞ！」と積極的にCの面倒を見始めた。Dのそんなやさしさを察しきれないCは、Dの冗談にムキになって怒り、Dに向かっていくものの、身体が大きさが倍ぐらいで、頭の切れるDにはかなわず、文句を言いながらも席にもどってきた。それからというもの、Dはまるで担当の係りのように昼食時に顔をだしてはちょこちょこCの面倒をみるようになって

た。そんなDがCには、まるで兄貴か父親のように感じられていたのか、他の生徒たちやカウンセラーには逆らわず、遠慮しながら丁寧語で話すCが、Dには身体で体当たりしていた。DはCにとっては唯一本音でぶつかれる存在となっていた。

Dがカウンセラーの代わりにCの面倒をみるようになると、他の子どもたちも自然にCに接触しはじめる。例えば、Cが、「おい、D!」などと、呼び捨てにすると、ほかの生徒が、「お前、先輩に向かって、そんな言い方するものじゃないよ!」と注意して時のことである。それを聞いたCも「Dはいいんだよ!」と言いかえたものの、友人からの言葉は心に残ったらしく、次から人前で本人を呼び捨てにすることはなくなった。またそんなCとDの様子に影響され、他の生徒達もCに関わりはじめた。時折、「先生、Cがこんなことした!」と訴えてはくるものの、互いに人間関係を磨いているように感じられる。みんなと騒ぎたいCにとっても、カウンセラーよりもその方がありがたい様子であった。しばらくしてCは、クラスに多少の違和感は持ちつつも、授業がはじまる時間に、すっと戻っていくようになった。

### c. 「いいこ、いいこ」の伝染

Eは2年生の女子生徒、数週間前に祖父を亡くしていた。一見明るく何事もないように振舞っているEであったが、放課後ふと部屋に入ってきて1人で「おじいさん」の絵を描き始めた。もともと絵が好きだったEではあったが、人の絵を描いたのは初めてだった。「今日は、おじいさんの絵なんだね!」とカウンセラーが声をかけると、「この前おじいちゃん死んじゃったの…おじいちゃん、とっても好きだったのに…」と答え、そのまま緊張の糸が切れたかのように泣き始めてしまった。カウンセラーは、ただただE子の頭をなでながら、しばらく話を聞いていた。その様子を見て、日頃はやきもちやきの生徒たちも、さすがにひっそりと離れて遊んでいた。Eが落ち着いて帰ろうとした時、1年生の子がEに、「大丈夫?」とやさしく声をかけた。するとEはその後輩の頭をなでながら、「ありがとう。大丈夫だよ」と答えた。その日は「いいこいいこ」がカウンセリングルームで流行った。カウンセラーの1人への対応が、他の生徒へとどんどん広がっていくことを感じた。

### d. 担任と不登校生徒をつないだ交換日記

Fは2年生。半年前に体調不良で学校に来られなくなったことをきっかけに、体調は良くなったものの、敷居が高く学校になかなか来られなかった。体調が良く

なったのに学校に行けないFは、家族から学校のことを言われることが一番嫌いな様子だった。そんなFが決死の覚悟で週に1度ほっと・ルームに来られるようになった。Fにとっての登校は、特にカウンセラーと話したいわけでも、勉強したいわけでもない、とにかく学校には残りたい気持ちを行動で示したかったようである。家族に付き添われてきたFは、カウンセラーとコミュニケーションはとれるものの、箱庭も、絵を書くことも、紙粘土などをさわること、本を読むことも、勉強することも気が進まない様子だった。来談の時間をどのように過ごそうか話し合っていると、ふとFが、「ここに来たら、学校に来たことになるのかなあ?」と担任の反応を気にしていることを語り始めた。そこでFの出席が記録できるものはないかを考え、担任の先生との交換日記を提案してみた。最初は「交換日記」という言葉に戸惑っていたFであったが、自分が学校に来た証拠になり、それを担任が確実に確認できることから、その日から書き始めると言い出した。Fは、はじめてかばんの中から筆箱を取り出し、おそらく久しぶりにノートを開き、担任に向けてのメッセージを書き始めた、最初は「来ました。…」とほんのひとこと。それでもなんども消して書き直し30分近くの時間を要した。

一方的に始めてしまった交換日記であったが、これまで多少情報交換をしていたこともあって、担任は快く承諾してくれた。次の週、ノートには、数行にわたって担任からの返事が書かれていた。また内容としては、彼が続きを書きやすいように、また少しでも文章を書く練習となるように、「…を、もうちょっと詳しく教えてください。」と書かれていた。Fはそれを何度も何度も読み返し、どう書いたらよいか、家族と相談しながら担任への返事を書き始めた。家族も快く彼の自主性を尊重しながら相談にのっていた。日ごろは忙しい家族と一緒に勉強する機会はこれまでに多くはなかったのではないだろうか。さらにこのノートが始まったことで、「こんな配慮をしてもらえると行けるかもしれない」という彼の言葉を、カウンセラーや家族が伝えるのではなく、彼が直接担任の先生に訴えることができるようになった。このようにして回を重ねるごとに、Fの文章は次第に量も質も向上していった。また彼がある程度決まった日に登校してノートを書いていることを知った、彼の得意な教科の教員が、偶然を装って部屋に顔を出してくれた。それをきっかけに、その教員が空き時間にFの勉強を少しみてくれるようになった。しばらくしてその教員が忙しい時には、ほかの学年の教員が協力してくれるようになり、彼は次第にカウンセリングルームで、彼のできそうな教

科を少しずつ勉強するというスタイルを確立していった。Fなりのスタイルが定まってきたある日、一度勉強を終えて帰りかけたFが戻ってきた。これから「授業に出てみる！」。1年半ぶりの授業であるのに、彼は躊躇せずに、かばんを置き、教科書と筆記用具を持って教室に戻っていった。クラスメートは一瞬喜びの表情を見せたが、静かに彼を受け入れた。彼が「授業に急に出て、みんなが急によってきたら戸惑ってしまう…」と心配していたことを担任がちゃんとクラスメートに話してしてくれたのである。彼が無事に帰った後、クラスメート達がどやどやと「ほっと・ルーム」にやってきた。「先生みたでしょ！うちのクラスの団結！」と満足そうにまた自慢げに語っていった。そしてノートでのコミュニケーションになれてきたFは、次第に直接担任に自分から話しかけるようになってきた。これは担任やその他の教員の協力があったはじめて可能になった援助である。

#### e. 優先順位

オープンルームによって、ちょっと話して行きたいと思っている生徒がよっても、他の子が話している場面も少なくない。本年度は特にこういう状態が多く見られた。生徒達にとってはその状態は非常にストレスフルである。ある日しんどい問題を抱えた5年生のGは予定時刻では話足らず、他の生徒達に開放する時間になっても、体調が悪いと寝込んでしまった。Gは常連であり、この部屋のルールは十分にわかっているため、「寝ていてもいいけれど、部屋を開けてもいいかな？」と聞くと、仕方なしにうなずいた。しかし部屋を開放したあとも、カウンセラーの横に座り、膝枕状態で寝始めてしまった。やっと開放された部屋に、仲間を連れて来た1年生のHは、そんな上級生であるGの姿を見て、「具合悪いなら、保健室にいけばいいだろう！」と苛立ちを隠せない様子であっ

た。カウンセラーが、「うん。でも行けないぐらいしんどいみたいだから、もうちょっと寝かしてあげようね！」と答えると、H達は静かに遊び始めた。Gはずっと寝たふりをし続けてくれていたため、カウンセラーはH達の話にも対応することができた。Hが機嫌を直した頃、Gは「だいぶ良くなったから…」と帰っていった。それからしばらくして、Gの面接中に、Hの友人Iが泣きながら駆け込んできた。カウンセラーが「今面接中だから、保健室で、もうちょっと待っていてくれるかな？」と話しかけると、Gが「私、今日は大丈夫だから、その子入れてあげて！また来るね！」と、すっと去っていった。またしばらくしてIが話している時に、ちょっと年上のJが深刻そうな顔で現れたとき、Iが「私はもう大丈夫だから！」とJに時間を譲っていた。このようにして、生徒達は部屋に来た順番ではなく、それぞれの顔色を見ながら優先順位を決めているように思えた。ちらっと顔を出しても、「忙しそうだから、来週来るね！」とすっと部屋を後にしていく生徒達も少なくない、こころ温まる思いとともに、心強いステキな味方がいることに感謝している。

#### 参考資料

- 東京大学大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター 2001 学校臨床総合教育研究センター年報（ネットワーク）第3号
- 東京大学大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター 2002 学校臨床総合教育研究センター年報（ネットワーク）第4号
- 亀口憲治・Richard L. Hayes・高橋 均・長谷川恵美子・高岡文子 2001 総合的心理教育におけるカリキュラム開発 東京大学大学院教育学研究科紀要 第41巻 pp.510-525